

植 物 採 集 (Ⅱ) 一 寺 の 夏 (7) 一 原 田 慶

大変な草いきれの中で、大きなポリ袋に採集したのは、メヒシバ、オヒシバ、カヤツリグサ、ヒメクグ、テンツキ、オヘビイチゴ、セリ、コナギ、イヌヒエ、タデ、ウナギツカミ、ミチヤナギ、ヨモギ、カワラマツバなど、道端や畔にたくさん茂っている類の草であった。

形を整えてこれを押し葉にし、標本を作るのは昨年が続いて、中学生のちょっと苦しい夏休みの作業である。日本には約六千種くらいの草と木が生えているが、今は名もない雑草なんていうのはなくなつて、みなしかるべき名を持っている。その名は動物名、地名、古い習慣の名、方言、外国語などからできている。

ということが前川文夫「植物語源考」の中に書かれているが、植物名も古いものの由来は、いろいろ考察されても、きめてのない場合もあるらしい。

方葉集の中に出てくるいちじの花というのが、ヒガンバナだと考える説もあるが、「植物語源考」では、イタドリとして、その理由が説明されている。ヒガンバナとイタドリでは、すっかり感じが変わるけれど、ヒガンバナの燃える季節が短かすぎること考えると、万葉にはイタドリがふさわしいようにも思われる。

私は初めて、オオイヌノフグリという植物名を聞いて驚いたのであったが、オオイヌノフグリは、明治二十年、二十五歳の青年だった牧野博士が、東京のお茶の水あたりで発見、採集されたもので、欧州原産の帰化植物、学名はヴェロニカ・ベルシカというのだそうである。ベルシャのヴェロニカということだろうか。ヴェロニカという、ルオーの描いた聖ヴェロニカを思い出すが、日本名は、この草の実が犬のふぐりに似ているからだという。花は空色。摘もうとして触れると花がぼろりとこぼれて逃げる。ヴェロニカの涙とでも言いたい、可愛らしい花である。

八月四日。夏の真昼、暑さしのぎに植物図鑑を眺めていると、すぐにも野山へ出かけて行きたくなる。

隣家の壁が寺の庭と接している所に、小石交りの、一筋ざくざくしている部分があつて、サンショ、ミョウガが植わっている。朝陽があたるが午後には少しづつ陰が広がってゆく。そこに十センチほどの糸のように細い茎が一本、葉が先端に三枚輪になつてついている。クローバトよりは大きく、香のよいミツバよりはずっと繊細な草が直立している。若い時には丸い葉だが、だんだん先のとがったおとならしい形になる。ところどころに一本だけすっと出るので気にもしていなかつたのであるが、今日見ると、その葉にならんで、花らしいものが出ていた。鉛筆より細い仏焰苞は全体が緑色である。しらべてみると、カラスビシャクといって、この花に似合つたよい名前を持つていた。マムシグサやウラシマソウと同じ、サトイモ科である。マムシグサは茎のまだらな色から言うらしいけれど、大きな苞の中にへビが入っているなどと気味悪がられるのは、その名前からかと思われる。仏焰苞を持つ種類の草は、林の中など、あまり陽のあたらない暗い所に見かけることが多い。

カラスビシヤクの根は丸い芋だったが、すぐちぎれて落ちてしまった。#本種畑地ニ侵入スレバ、其駆除甚ダ容易ナラズ。球茎ヲ薬用トス。#と説明されている。いつか植木の根について入ってきたものであるうか。この粹でしゃっきりした仏燧包は、今日の収穫であった。

カラスビシヤクのある場所と反対に、西陽が少し射しこむ位置にも、以前から気になつてゐる草があつた。花らしいものも見えず、ひゆ科かいらくさ科のようで茎が細く、草全体が緑、ハートの形をした薄い葉は、少しの風にもひらひらとそよいでゐる。その葉のようすから調べて、やつとその草がクワクサであることがわかつた。

また、物干場の床下にアカザが一本、花の種をまくための箱にスベリヒユが一株生えた。どちらも昨年の夏休みの植物採集の種がこぼれたものである。来年たくさん芽を出したら摘んで食べてみようと思ふけれど、スベリヒユは耕地雑草で、耕作・施肥・作付といった条件がはいらなくなると、あえない最後をとげるといふ仲間である。

スベリヒユは、押し葉にするのがとてもむづかしい。植物採集のハンドブックにも、特別な処理をする押し葉として説明されている。熱湯につけて細胞を殺してから、よく水分をふきとり押し葉にする。その通りにしてもうまくいくとは限らないが、去年はその説明を知らなかつたこともあつて、押し葉は失敗した。萎びたようになり黒ずんで、葉がみんな取れてしまつたので、捨てたのであつた。

スベリヒユの種は一株から三万〜二十四万粒も結実するという。その中のたつた一粒だけが発芽したのだからか。

草木もその生育の条件を考えると、今そこに生えている草や木が、何故そこにその姿であるのかというところが、すべての生物、中でも自然を破壊することに、最も無頓着な人間社会の現状を、物語っているものであることに気付く。虫を集めることを嫌われ、落葉を厭われて、肩身のせまい思いをしている町中の草や木々たちについて、もっとよく知らなければいけないのだと思う

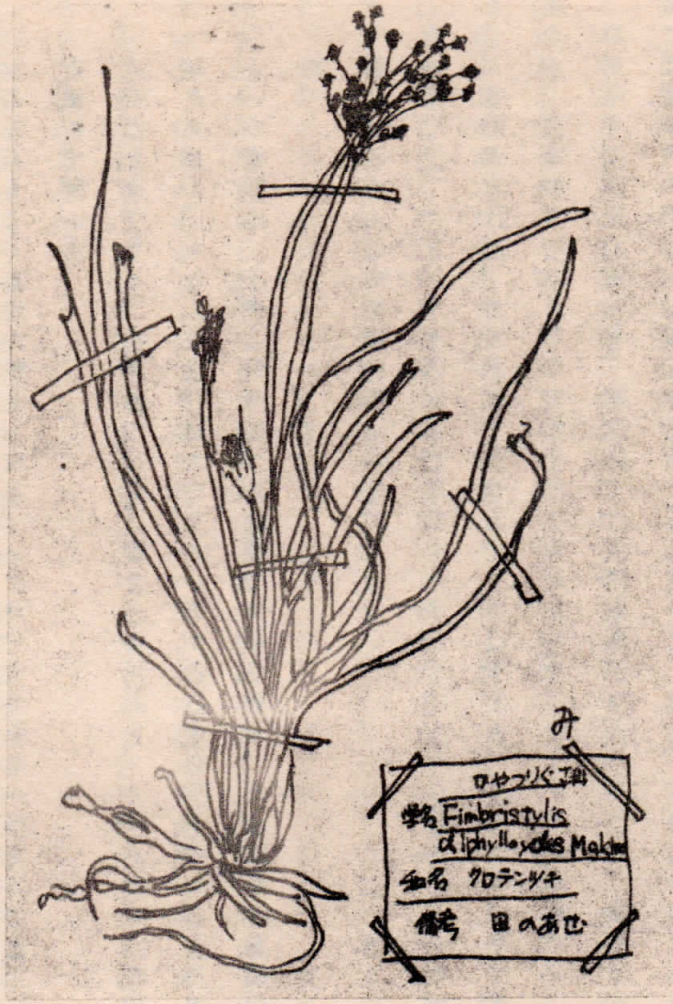
ナ ツ ズ イ セ ン 一 寺 の 夏 (8) 一

八月十三日。ナツズイセンの少し開きはじめて花を白い花瓶にさした。熱い土に咲いているよりは、切り花にしたほうが少しでもゆっくり咲いてくれるかもしれない。

三月の初めに芽を出した先の丸いへらのような葉が、暖くなるにつれて、白っぽい緑が黄色くなり、暑くなつたと感じるころにはすっかり枯れてしまう。八月になってそのあたりから、ぞうげ色のスプーンを裏から見たような形のつぼみが踵を出す。そのまま伸びて高さ五十センチ余りになり、一本の茎の上に車輪のように広がって、横向きに花を五つも六つもつける。うすい紫がかつたピンクの花は、開ききらないササユリのようにやさしい。みんな一度に咲くわけではなくて、二つ三つと咲いていって、おしまいのが開くころには、先の花がしおれていることもある。

日本の中部地方以北の山地、樹陰に野生する多年草、と説明されているように南の方で自生していることはな

い。主人がお友達にいただいて植えたものであるが、葉もなくなった土からまっすぐに伸びた茎の上に。ふさふさと開いた花は、不思議なほど美しかった。球根を移すたびに残ったものが芽を出し、今は四カ所ほどに花が咲



ゴバナ、などと呼ばれるのは、そのことに由来するのであるが、ひがんばを科でもスイセンやタマスダレのように葉があつて花の咲くものもある。

く。

ナツズイセンはひがんばを科、花が咲くころには葉がなく、花と葉が季節を異にしている。この仲間は中国や日本などに十余種あつて、日本に自生しているのは、シロバナマンジュシャゲ（鹿児島県）、シヨウキラン（九州南部）、キツネノカミソリ、ヒガンバナ、ナツズイセンの五種だそうである。ハミズハナミズ、ハシラズバナシラズ、オヤシラズコシラズ、ステ

ナツズイセンを和名ワスレグサというのも、葉が枯れて忘れたところに花が咲くからのことらしい。

父を亡くしてその悲しみを忘れるために、萱草を墓へ植えたという話がある（『今昔物語』）が、ナツズイセンの忘草もよく墓地へ植えられる。「ワスレグサを墓へ植えるのは、忘れるようにというずらか」と奈川や安曇村で聞いた。

人間ばかりでなく、白馬村では犬、猫などが死ぬと、ノバタケ（山の畑）のツムジ（端）に埋けてこの草を植えておく。「こんなところになでワスレグサあるずら？」「おらとこの犬死んで埋けたからだいね」などという会話が、小屋（おやつ）の畦道で交わされる。この場合は墓標代りで、忘れなために植えるみたいだ。

と宇都宮貞子さんの本に書かれている。

寺の庭では、ナツズイセンがどこに芽を出すかを知っているから、「なで忘れ草あるずら」などと驚くまでもなく、季節が来れば、このあたりから出てくるはずだと、地面を見つめて待っている。寺の庭には萱草も忘草もあるが、墓地の方にはどちらのわすれぐさもなくて、ヒガンバナが咲く。

群馬県で弟が死んだとき、嬭恋村では共同墓地がなかったので、家主さんの墓地に葬らせてもらった。その墓にはラッパスイセンがたくさん植えられていて、母も、百日しか生きられなかった弟のために、ラッパスイセンを植えた。他の家の墓地でもラッパスイセンを見た。何故それを植えたのかはわからない。母は特別な意味はないという。何かわけがあるのではないかと調べてみたが、それらしいことはみつからなくて、

・ホメロスの詩にも、春とともに生命がよみがえる宗教的な象徴として書かれている。

・ギリシヤ以前の地中海地方の古い言葉では「死人の花」という意味を持ち、人間の靈魂に関係があると信じられていたという説がある。

ということくらいであった。何かいわれがあつてスイセンを植えるのか、雪が溶けると間もなく咲く花だから選ばれたのかわからない。こんなことにあつたと宇都宮さんの仕事の大切なことがよくわかるのである。

弟の墓地は、村を見おろす山の中腹にあつた。段々畑のいちばん上で、墓から上は山林になつていた。からだの小さなこどもには、谷の底のように思える急な坂道を上つてゆく。両側は畑で、見上げると、茶の木や、サザンカ、クワなどが植えられていた。雨の日は水の流れ下るらしいこの道は、赤土が見えて茶の花がこぼれていたり、ドングリがころがつていたりした。山道への入り口で右へ折れて、畑地を横切つて少し進むと、きれいに掃除された墓地があつた。広くない墓地の下段の隅に弟の墓があり、あたりにたくさんラッパスイセンが植えられていた。朝陽があたり、いつも風が吹いているような静かな場所であつた。

谷道を墓の方へ折れずにそのまま山に入つてゆくと、左方向へ曲がりながら山の奥へ道が続いて、ドングリやクリの木が見えた。

そちらへ上つて行つたことはなかつたが、宮沢賢治の「ドングリと山猫」を読んだときにすぐこの山を思い出した。

後年、弟の墓を滋賀県に移したときにも、母は群馬県の墓のスイセンを持って帰つて弟の墓に植えた。しかし

こちらの方では、根のついた花を墓地に植えるものではないと言うそうである。

寺の庭にはスイセンがたくさん花を咲かせるようになった。それは、金盞銀台と呼ばれる白い花の中央に黄色い盃のあるものと、房咲きの八重のスイセンの二種類で、日本にたくさん自生している種類である。大変つよい香りを持っている。春山行夫『花の文化史』によると、ギリシャ神話やホーマーの詩に現われているのは、この金盞銀台と呼ばれるスイセンなのだということである。

夏 の こ よ み 一 寺 の 夏 (9) 一

八月二十八日。間もなく学校では二学期が始まる。九月も近いというのに暑さはいつこうに衰えず、三十度を超える真夏日が続いている。新聞によると七月十一日以来だという。今日は、最高気温が三六・八度、七月三十日の三七・三度につぐ今夏二番目の暑さになった。

雨も少なくて、七月二十二日以来、雨らしい雨が降らない。市内の雨量は平年の六パーセントしかないそうである。農作物や宇治の茶畑、街路樹のサツキなどに早ばつの被害が出はじめているらしい。寺の庭でも朝夕にたつぷりと水をまくが、たちまち白く乾いてしまう。

府立植物園でもカツラ、サツキなどの葉がそり反ったりし始めているうえ、園全体に樹木が弱ってきている。
：「これまでは少々の早ばつでも木が弱ることはなかった。園の北側一帯の宅地化が進んで地下水が減少

しているのでは」とアスファルトで覆われた都市の地下の「砂漠化」の影響も指摘していた。
などの新聞記事も見られた。

寺では乾くといいながらも緑の木や草があるので、アスファルトにとりまかれていた町並みに比べれば、ずいぶん涼しいのだろうと思う。しかし本堂の仏花などは朝夕に水をかえても二日くらいでしおれてしまう。

このような暑さの中で、ほっと息をつかせてくれるのが、墓地のモミジアオイである。丈高い茎の上に元気な赤い花をかざして立っている。茎は木のように硬くて、二メートル近くまで伸びる。上の方に塔のような形でたくさんのおぼみをつけて、下から順に次々咲いてゆく一日花である。この強烈な夏日には掌より大きなまっ赤な花も、決して目立ちすぎることはない。卵形の五花弁は根本が細くくびれていて、そり返らんばかりいっばいに開き、中央に一本、長いしべが伸びている。

モミジアオイは、主人が中学時代の教科書に「紅蜀葵」という題の絵があつて忘れられなかつた花だそうである。いろいろな本をしらべてみて、『寺崎・日本植物図鑑』という本に、「モミジアオイ（コウシヨッキ）」という項目がみつかった。この花は北アメリカ原産の多年草、日本へは明治初めに渡来したということである。九月から十月に咲く花であるが、今年、寺では八月七日に初めの花が開き、毎日どの枝かで花が咲き続けている。なお黄蜀葵というのがあつて、これは中国原産の一年生草で、トロロアオイという黄色い花である。アオイ科の花の中で紅蜀葵と黄蜀葵は、葉の切れこみの深い形や、草全体の姿も似ているようなので、花の色によってどちらかが呼びならわされたもののようにも考えられる。

モミジアオイと同じアオイ科の花で、ムクゲがほとんど同時に、フヨウが少し遅れて、咲きだした。どれも一日花で、朝咲いて夕方にはしぼんでしまう。庭のムクゲは一重咲きで、紅紫色、底が赤くて十センチくらいの花が咲く、もつともふつうの種類である。町を歩いていると塀の中にムクゲが咲いているのをよく見かけるが、八重咲きもあり、色も白いのや、うすい紫、赤いものもある。日本で品種として確認されているものだけで、四十から五十種もあるのだという。

ムクゲには、ほこりのようなアブラムシが、若い枝にいつぱいつく。フヨウの方には、小さい時には葉と同じうす緑のシャクトリムシで、少し大きくなると緑と黄のあざやかな色になる毛虫がつき、葉を網にしたり、まるめこんだりして枯らしてしまう。これらの虫から木を守るために、卵を産みつけられないうちに、葉に薬を吹きつけて歩くのであるが、クルミの木などは大きくなって噴霧器がとどかないので、壁根裏の窓から散布する。それでも薬のかからなかった枝を、虫はよく知っていて、その枝にイラガの幼虫や、テンマクケムシと呼ばれるオビカレハの幼虫がびっしりについて、みるみる枝を裸かにし、こまかい砂粒のようなふんを降らせる。あまりの元気にさにおどろきながら、枝を切りとって焼いてしまう。

そんなことを繰り返かえしているうちに、季節が移って、生き残った虫は次の季節の準備をし、木々は実をつけて、をにごとまなかつたように過ぎてゆくのである。ただ今年の夏は例年とちがって、雨が少ないせいか、虫はそれほどたくさん産まれていない。

見えないところで季節は進んでいるにちがいないと思うけれど、夏はまだ仁王さまのようにあたりをにらみつ

けて、カンカンしている。なんと長い夏であるうか。

フヨウやムクゲは一日花で、はかないという見方もできるが、この暑い季節の中で、いつもあたらしく若々しい姿を見せて、日々に咲きつぐ巧みさは、ただ感嘆するばかりである。

少しづつ変ってきているのかもしれない地球の上の、自然のサイクルの中で、あわてずに一日々々、ひそかに咲かせる小さな花を用意できれば、それ以上に望むことはないと思う。ムクゲは夏から秋まで、ずっと咲きつづけるので、「無窮花木」という別名も持っているのである。（「寺の夏」終り。一九八五年 カット・原田道子）

転 調 満 庭 芳 一 李 清 照 (三四) 一 原 田 憲 雄

草かをる池／緑濃き庭／夕晴れて寒さ透る窓の紗／部屋とざさむ／よし客の来むとも／ひそとさかづき前に
して／ただかなし／海のべ空のはて／ひとありやなし／野ばらみな散る／なほ梨の花はありとも／かの年
／めでにき／新しき香に袖くゆし／火をいこし茶をたてぬ／ぬめる道たける馬／流るる水かるき車／風狂ひ
雨のしぶくをもともせず／あたかもよけれ／酒を煮き残んの花に／今や／おもかげもなし／ふるとしをし
のぶべき

九十五字。前段四十八字、十句四平韻。後段四十七字、十一句五平韻、または十句四平韻。これが「満庭芳」。
清照とほぼ同時の周邦彦は音楽に詳しい人で、その『片玉集』の「満庭芳」には（中呂）と注記する。すなわち、「満庭芳」を演奏するときは「中呂宮」の音調でするのが例だったらしい。それを「中呂宮」以外の音調で演奏

「満庭芳」を演奏するには「中呂宮」の音調でするのが例だったらしい。それを「中呂宮」以外でと指示するのが「転調」で、「転調」でも詞の形式は「満庭芳」と同じ。この作、不明の文字がいくつもあって、完全な姿はわからないが、あちこち剝落していてもあの中央アジャ出土の「樹下美人図」が美しいように、この詞もすばらしい。拙訳、またその基礎となる解釈は、想像で補ったところがある。

芳草池塘，

Fāngcǎo chí táng,

綠陰庭院，

lǜ yīn tíng yuàn,

晚晴寒透窗紗。

wǎn qíng hán tòu chuāng shā.

「芳草池塘、緑陰庭院」なんて、なんでもない、ありふれたことばをつなぎ合せただけのように見える句が、しかしここにこうして彼女の手でさし出されると、なんと晩春のデリケートなメランコリックな気分が漂いはじめることだろう。これこそ彼女の独自性というべきものだろうが、その「独自」性は、実はさきだつ作家のすぐれた作品群からはばかりなく奪取し、選びぬいて使うという古典的手法、中国の詩人たちにはあたりまえの方法を、お座なりにではなく、彼女の感性・知性の標準に厳密に合わせて使ったところから生じたものらしい。ここではそれを、わたしの力の及ぶ範囲で、さぐってみよう。

温庭筠に「小園芳草緑、家住越溪曲、楊柳色依依、燕婦君不帰」「画楼音信断、芳草江南岸」「緑陰濃、芳草歇、柳花狂」「波影、満池塘」などの句があり、いずれも、宋人にとっての詞の教科書であった『花間集』に収める。これらの「芳草」の向こうには、本稿(三二)「小重山」でふれた王孫・春草がほのめくと見てよいのだ

う。「楚辞」を引きあいに出すなら「離騷」の「何所独無芳草兮、爾何懷乎故宇」(どこにだって芳ばしい草ぐらひはあるのに、どうして故郷の家ばかりなつかしがるのか)までさがのぼってよく、そこからまた引きかえして、漢の古詩の「蘭沢多芳草」、さてはぐっと下って杜牧の「芳草復芳草、断腸還断腸」の句を含む詩を背景にとりこんでさしつかえない。「池塘」といえば謝靈運の「池塘生春草」を思いうかべるのはあたりまえで、韓偓の「臨階一盞悲春酒、明日池塘是緑陰」こそこの詞にはより親しいだろう。「庭院」そのものについては前に記した。「南史」に見える陶弘景の松を植えたそれより、元稹の「春詩」にいう「独葱籠」の庭院を彼女は思いうかべていただろう。古人の語を使いながら「芳草池塘、緑陰庭院」の二句が独自の響きをもつことはさきにくわえた。だが、その独自は、実は次の「晚晴寒透窓紗」と結びついて決定したといふべきだ。もともと、これも先蹤がないわけではない。「晚晴」には杜甫の「湖闊兼雲霧、樓孤屬晚晴」、魏承斑の「煙雨晚晴天」など、「窓紗」はカーテンの薄絹だが白居易が「面堂三月初三日、絮撲窓紗燕払簷」と描き、それより何より魏承斑の「金風輕透碧窓紗」(訴衷情)こそ李の句の本歌、あるいは魏氏の句を彼女がヒョウセツしたというほうが手っとりばやいくらいだ。しかし大切なのは、盗んだ清照の句と盗まれた魏の句とどちらがすぐれるか、という問題だ。魏氏は五代の代表詞家のひとりで『花間集』に十五首を収める。この句も、それを含む一首もすぐれた作だが、金風は秋風で、秋風が吹いて薄絹のカーテンに冷気の透るのは、いわばあたりまえである。ところが李氏の句は春であり、晚晴、夕晴れによって生じた寒さが窓のカーテンを透して身にしみる、というので、感覚として新鮮で、デリケートであり、このいきいきした感性が、初二句にも透徹して、読者を彼女の特異な情界にひきいれてしま

う。こうなると三句は李清照以外の何物でもなく、いまさらヒョウセツ呼ばわりすれば、呼ばれるものがばかだということになるう。

××金鎖

(Yùgōu) jīnsuǒ,

管是客來吵。

guǎnshì kè lái shǎo.

××はテキストの文字が欠けている。一本には「玉鉤」とする。それなら yùgōu で、玉のかぎ、すだれをかかげたときとめておく金具に玉をちりばめて（実際にはちりばめてなくても）詩では玉鉤とよぶ。「金鎖」は黄金のかぎ、これはとびらをしめる方のかぎである。鹿虔扈に「金鎖重門荒苑靜」、尹驪に「庸親往事、金鎖小蘭房」の句がある。いずれも美しく楽しかった過去とはまったく変化した現在の光景を見るに忍びない感情がうたわれ、ことに尹氏のは、かつて恋人と共に見たのに今はその人が不在で、思い出すとつらいから部屋も閉ざしっきりだというほどのところである。たぶん清照の句はこれを伏せているので、××は「玉鉤」でもかまわぬが、あるいは「重門」「小房」のたぐいであつたかもしれぬ。ただ尹氏は男の立場でうたっているが清照のは女の立場で、「たれこめて」の方向にうたうこと、いうまでもない。

「管是」は口語で、管他是警察不是哪が、彼が巡查であろうとなかろうとどうでもいい、というほどの意。だからこの句は、ひっこもってしましましょう、客が来たっていいじゃないの、といったところ。自分にすねている気味がよく表われている。「吵」は末から元にかけての語気助詞で、さきに引いた例文の哪にあたる。

寂寞尊前席上、

jì mò zūn qián xí shàng,

惟××、
wéi (chóu)

海角天涯。
hǎi jiǎo tiānyá,

おのれにすねるように引きこもり、尊前、酒だるを前にした、といつても杯を前にしたというほどの意、その独りぼっちの席では、いくら飲んでもただ：。ただの次の××もテキストに欠けている。その上の一字は一本に「愁」とする。下の一字はそれとつりあう仄字だったはず。「海角天涯」は本稿(二八)「清平樂」にも出ていた。漢代の思想家王充の『論衡』に「いま夫妻死すれば寂寞として声なし」といい、『文選』の江文通の「別賦」に「寂寞に感じて神傷む」といふ、王維は「寂寞掩柴扉、蒼茫对夕暉」とうたった。さきに引いた「楚辞」ついでにいうなら「野は寂寞として人無し」と「遠遊」にあり、海や空のはてに身をおく者にふさわしい。杜牧は「身外任塵土、尊前極歎娛」とデカダンスの感情を言い放ったが「多情却似総無情、唯覺尊前笑不成」と悲哀をうたわねばならなかった。「鄭交甫は則ち江辺に佩を解き、蘇緑華は則ち席上に詩成る」と賦したのは陸龜蒙だった。李清照は緑華に劣らぬ詩を作るだろうが、佩を解く交甫はどこにいるのか。

能留否、
Néng liú fǒu,

餘醺落盡、
túmí luòjìn,

猶頼有××。
yóu làiyǒu (Yhūā),

この三句は賈至の「香粉当爐弱柳垂、金花臘酒解餘醺、筵歌日暮能留客、醉殺長安輕薄兒」(春思)を本歌とするのであろう。妓女が酒と歌で長安の浮かれ男を引きとめてみせる、という歌だ。餘醺は重ねてかもした酒。

清照の詞の方は、その酒に似た色の花で、牧野植物図鑑は「ときんいばら」*Rubus Commelssonii* Poir. だとす
る。『中国高等植物図鑑』が学名 *Rosa Subus Leul. et Vant.* としてあげているもののようにも案ぜられるが、
いずれにしても野ばらの一種に違いなく、香り高く心そそる花である。××はまた欠けていて一本に「梨花」と
する。それなら *Thua* である。梨花は××より早く咲く花だから合わぬという説もあるが、土地や陽あたりのぐ
あいで前後することもあるのではなからうか。この三句、あの人をどこの誰かが引きとめているのだろうか。こ
ちらで待つわたしに、なお梨花のように淡あわした清らかさは残っていても野ばらのような芳烈な若さはなくな
ってしまった、というほどの意であろう。以上が前段。

當年,

Dāngnián,

曾勝賞,

céng shèngshǎng,

生香薰袖,

shēngxiāng xūnxiù,

活火分茶。

huóhuǒ fēnchá.

「當年」は「あの年」、「當年曾是青春客」と邵雍がいったようにそれは若いころのことで、さきにも引いた
温氏は「當年還自惜、往事那堪憶」と歌ったが、清照はそのたえがたい往事をおもいおこす。薛昭蕴が「清明節、
雨晴天、得意正當年」といった、節句、「寒食」ともよばれる行楽の数日、陽暦で四月の五、六日頃のことにな
がいない。男は鬪鶏やけまり、女はブランコにのったり草をつんだり。そんなことをしてる間に袖に新花の香り
がしみとむのをうれしがり、火をいこしてお茶をたてたり：。「生香」は香料の名で麝香の一種ともいうが、こ

このはわたしの解でいいだろう。「活火」は炭火の炎のことで唐代の茶にくわしい李約が「茶は緩火で炙し、活火で煎すべきだ」といっていて、そのあとの説明によると、どうやら茶を立てる水のわかし方について、はじめはゆっくり時間をかけ、最後に強い炭火で煮るが、ふきこぼれるまでにゆかぬようにせよ、ということらしい。それは今の日本で茶を立てるときの湯のわかしかたと同じことらしい。「分茶」という語は宋代の書によく出てくるが説明はないようだ。おそらく団茶、茶の粉をまるくかためたもの、から一服あるいは二、三服分、必要なだけとり分けることで、日本の茶でなら抹茶を茶杓でとり茶わんに入れるような行為をさし、ひいては茶をたてることを指したのだろう。「分茶」という語の説明とてかりに正確でないとしても、この詞の中での「分茶」はわたしのいった方向で使われている。

××龍騎馬、

(Jīma yóu) lóngqí mǎ,

流水輕車。

liúshuǐ qīngchē,

××は欠けていて、一本に「極目猶」とするが調子が合わない。また「驕」は原本には「嬌」とするが学者のいうように誤りだろう。欠けた文字が推測しにくいので決定した解釈も出せぬ。たださきに引いた薛氏の句に、直ちに続けて「馬驕泥軟錦連乾、香袖半籠鞭。花色融、人競賞、尽是繡鞍朱鞵、日斜無計更留連、帰路草和煙」という。これに『後漢書』明德馬皇后伝中の「車如流水、馬如遊竜」をつけあわせれば、ほぼこの詞の句ができてきょうというものである。若い美しい女たちの野遊びするところへは、若い男達が馬を走らせ車を飛ばしてやってくるものだ。

不怕風狂雨驟，
Bú pà fēngkuáng yǔzòu,

恰才稱，
qiàcái chēng

煮酒殘花。
zhǔjiǔ cánhuā.

「風狂雨驟」は字面の似たところからは牛麟の「渡江楊花、狂風任風吹、日暮空港波浪急、芳草岸、雨如糸」や張泌の「綺疎飄雪北風狂」などを思わせはするが、むしろ王維の「劇囑史實」、一人の女を争つて青年たちがまっしぐらにかけつける、といった詩のその女主人公におのれをなぞらえての句ではないだろうか。「恰才」は口語で「ちょうど今」というほどの意、「稱」は「びつたり」。散りのこつた花を見ながら酒を煮るのに。願景が、「掩映画堂春欲暮、殘花微雨」とうたつたような残花である。

如今也，
Rújīn yě,

不成懷抱，
bù chéng huáibào,

得似舊時那。
dé sì jiùshí nà.

如今、いま、うつつかえつた今、それは前段の「ひそとさかづき前にして」の今なのだが、そこにはいだけあたためるべきものはなにもない。どうして似ていよう、「旧時」ついさっきまで想いかえしていたあの若かった「当年」に。温氏は「千万恨、恨極在天涯」（千万のうらみ、うらみは遠く天のはて）とうたつた。それほど大げさにはいわぬにしても、海角天涯をさまよう李清照のうらみはなかなか浅くはないようだ。(1986 4 20)

※前号正誤 22頁 8 10行 辺見↓偏見 23頁 14行 ラーウァナ↓ラーヴァナ 24頁 6行 もろもろと↓もろもろの 7行 ガンダルウァ↓ガンダルヴァ 12行 我所見魏何↓我所見云何

梵文 Cinteti kimidaṃ ko'yaṃ deśitam kena vā śrutam, / kim dr̥ṣṭam kena vā dr̥ṣṭam nagaro vā kva

saugataḥ, // < 38 > < N39 > (熟考したこれは何ここに何が示され誰によつて聞かれたのか、誰によつて何が

見られ都城やスガタはどこに見られるのか。// < 38 > < 南条本 39 >) Tani kṣetrāṇi te buddhā ratna-

śobhāḥ kva saugataḥ, / svapno' yamatha vā māyā nagaraṃ gandharvasabditaṃ. // < 39 > < N40 > (かの諸国土か

の諸仏かがやける城やスガタは何処に、これは夢か幻かガンダルヴァと名づけられた都城か。// < 39 > < 南

条本 40 >) Timiro mrgatṛṣṇā vā svapno vandhyāprasūyatam, / alātacakra dhūmo vā yadanaṃ dr̥ṣṭavāṇiḥ.

// < 40 > < N41 > (眼翳か鹿の渴望か夢か不妊の女の生んだ子か、旋火輪か煙かここでわたしが見たものは。

// < 40 > < 南条本 41 >)

世尊の示現したランカー城もその中にいた仏も、仏の子らも、ラーウアナももろもろの夜叉もすべてが消滅したとき、あとにのこされたうつつの夜叉王ラーウアナの心に次々に浮かびあがる疑問である。「鹿の渴望」とは *mitaḥ tṛṣṇā* の直訳で、魏訳の「陽炎」、辞書には盛気楼と説明する。渴した鹿がありもせぬ川や湖を見るように実在せぬ現象という意であろう。鹿と身近かに暮していた古代インド人の感情移入から生まれたことばとしておもしろく、ありもせぬ差別を作りあげる人間の心を省察するこの經典に使われるにふさわしい。旋火輪とは、たとえば暗い処でたいまつですばやく輪をかくと赤い火の輪が見える。その輪をいう。心理学の教科書のはじめの

方に錯覚の例としてよく出てくるものである。中村元『インド思想史』によるとガウダバーダ（六四〇―六九〇）の著したマンズーキヤ頌の第四旋火寂靜（Alatasanti）章は、たいまつを振って巡回すると暗中に種々の相が現るるように、一切の現象は識が転変して仮りに現われたものにすぎないとして、万有の不生不滅を論じ因果を否定するそうだが、楞伽や唯識よりおそく、その影響をうけたものである。前稿「世尊と夜叉王」六六頁にいう。

万雷の拍手のうちに劇が終り、観客も俳優も立ち去り、大道具も小道具もとり払われた舞台に、ふと立った主演の俳優の気持もこれに近いのではないだろうか。このときかれの胸にわきあがる疑問は殆ど限りないであろう。そのうちの百八問を展開したのが問答品の問偈であろう。今日いわれる百八煩惱とこれらの問いとがびったり対応するかどうかは知らぬが、百八という数はそこにかかわりがありそうな気がする。

ガンダルヴァの城は実在しない虚妄なものたえとして用いられる。ガンダルヴァは空中・水中に住むといわれる半神的精霊でアプサラスの配偶者。仏典では乾闥婆などと音写され尋香・香行などと訳される。『アタルヴァ・ヴェーダ』では六三三三のガンダルヴァがいるとされる。太陽・虹・月・ソーマ酒・雲の神格化といわれ、ソーマ酒の守護者、処女の保護者、狂気を引きおこす者、天上の樂師などの性格が与えられ、人間の上半身と鳥の下半身をもつ者として描かれ、ナーガ（竜）の敵対者とされ、仏教では八部衆の一で帝釈天の雅樂を司る。中には中有の五蘊をさし、また樂人一般や西域の俗俳優、幻術師をさしていうようにもなった。わたしは前稿で楞伽經を製作伝持した教団は、樂人や幻術師からなる劇団だったろうと推測した。その根拠のひとつは、ガンダルヴァがこの經にしきりに出て来ることにあった。魏訳の訳者ボディールチも幻術に巧みだったことも述べた。

二、またみずから深く思った、諸法の本性はこうしたものだ。みずからの心のみの境界は内心が証知しうるだけだ。だのにもろもろの凡夫たちは無知に覆われ、覚知することができない。見るものと見られるものは一切とらえられぬ。説く者と説かれる者、こんなものなどもまた無い。仏と法の真実のありかたは、有でもなく無でもない。法のすがたは常にこうしたもので、みずからの心のみが分別するのだ。もし物を見て実体とするなら、その人は仏を見ない。分別心にとどまらなくても、また仏を見えない。もろもろの現象の有ることを見ない、このようなものを仏だと名づける。もしこのように見うるなら、その人は如来を見る。智者はこのような一切のもろもろの境界を觀じ、身を轉じて妙なる身を得る、これこそが仏のさとりののだ。

魏訳「復自深思惟。諸法体如是。唯自心境界。内心能証知。而諸凡夫等。無明所覆障。虛妄心分別。而不能覺知。能見及所見。一切不可得。說者及所說。如是等亦無。仏法真實体。非有亦非無。法相恒如是。唯自心分別。如見物為実。彼人不见仏。不住分別心。亦不能見仏。不見有諸行。如是名為仏。若能如是見。彼人見如来。智者如是觀。一切諸境界。轉身得妙身。是即仏菩提。」

唐訳「復更思惟。一切諸法性皆如是。唯是自心分別境界。凡夫迷惑。不能解了。無有能見。亦無所見。無有能說。亦無所說。見仏聞法。皆是分別。如向所見。不能見仏。不起分別。是則能見。」

梵文 *Atha vā dharmataḥ hyeṣā dharmāḥ citta-gocare, / na ca bāhāvabudhyante mohitā viśvakalpanān,*
／／〈41〉〈M2〉（さてまたこれは心の境界における諸法の本性なのか。／しかし未熟者は覚知しない、あらゆる虚妄に惑わされて。／／〈41〉〈南条本42〉） *Na draṣṭā na ca draṣṭavyam na vācyaḥ nāpi vācakah, / anya-*

tra hi vikalpo' yam buddhadharma krtisthitih. // < N43 > (見るものなく見られるものなく、説かれるものなく説く者もない。 / 実にこの分別がここに仏と法の姿をもつてとどまつたにすぎない。 // < 南条本43 >) Ye pasyanti yathādṛṣṭam na te pasyanti nāyakam. // < 42 > Aparavrttīvikalpaś ca yadā buddham na pasyati, / apravrttībhavē buddhaṅ sambuddho yadī pasyati. // < 43 > < N44 > (見られるままに見る者たちは導師を見ない。 / < 42 > もはや分別なく、仏を見ない者、 / もはや生起の無いことに仏であることを見る者、それは仏だ。 // < 43 > < 南条本44 >)

ここは極めて複雑微妙な思想が展開されているようだ。梵文からそう感ぜられる。魏訳は、それを、言葉を補ってでも漏らすことなく、韻文形で、訳出しようと努め、唐訳は散文の形で簡素に訳す。

「みずから深く思った」にあたるものはこの梵文にはない。しかし梵文がいう「これ」は、に記されたすべて(夢、幻、ガンダルヴァ城、:)だから、40.のはじめの「このようなことを思った」の語を「みずから: :」とくりかえすことで指示し限定したのだといえよう。

ところで梵文の「これは心の境界における諸法の本性なのか」は、さきほど見た夢か幻かわからぬものを指して、人間の心という領域にたち現われるもろもろの存在のダルマター(存在としてのありかた)はこんなものだろうか、といっている。魏訳の「諸法の本性はこうしたものだ」はそれにつりあう。ただ「みずからの心のみの境界は内心が証知しうるだけだ」は梵文の「心の境界における」の語に対してはかなりの拡張ということになる。しかし、さきにラーヴァナが見たものが夢か幻かわからぬあやふやなものであっても、それを見たというラ

「ヴァナの感動はまざまざとラーヴァナの内心に証知されており、それが他の一切のものから存在しないといわれてもラーヴァナの内心には存在した、という方向までも魏訳の論理は伸びていて、それが後の方まで梵文と魏訳とのふくらみの違いとなつてゐるのかもしれない。

「見る」ということを考えるとき、主体としての「見る者」と対象としての「見られるもの」を分ける。ところが「見る者」はまざまざの欲望につき動かされて見るのだから、渴した鹿が陽炎に川水を見るように、見たいと思うものしか見出さない。見出したものは「見られるもの」だがそれが見出されたときにはそのありのままの姿で「見る者」の心に映じていない。するとありのままの「見られるもの」はそこには無い。「見る者」にはとらえられていない。「見られるもの」にとつては、「見られるもの」のありのままの姿を見る者こそ「見る者」でなければならぬが、見る者はおのれの見たいものをしか見ないのだから、「見られるもの」にとつては「見る者」はいないことになる。「見る」という、極めてありふれた行為でもすこし厳密に考えようとすると、このようにとらえどころのないことになってしまう。見るものがこれほどとらえどころがないものならば、聞く、かく、味わう、触れる、思う、……すなわち感覚・知覚によつて受けとることも、あやふやなことだといふことになる。あやふやだけれども、現に見えていて、見たつもりになり、見たものについて語れば、Vの語るXと田の語るXとがまったく同じ内容かどうかは分らなくても、大ざっぱなところで話の通じだ見かけがあれば、互いに了解した気になつて、その通じたはずの見かけがXのXらしさ、Xとしてのありかた、Xの本質といふことになる。それはしかし、ありのままのXとはかかわりはない。そこにはXは有りはしない。だがXが無いのだとも言いきれ

ない。こんなことは、ありふれた哲学入門書の認識論のところにも書いてあるだろうが、その認識のあやふやさを、それではすべての知識をあつかう人が常に厳密に思考の基本にすえて、考えぬいているか、というところではない。哲学者は概念を使って思考するが、概念は一種の分類された知識であり、仏教用語の「分別」の一種である。それは思考には便利だが、ありのままの事物と概念の間には大きな隔りがある。この隔りが、哲学者の死にも狂いの作業を、しばしばあざ笑う。認識の対象と対象の認識との追いかけてごっこそのものが哲学問題のアップ・トゥ・デートだったこともあった。今では流行おくれになってしまったのかもしれないが、流行は去っても問題が解決したきざしはなさそうである。この古くて新しい問題が、ほんとに生きいきと具体的な、われわれの日常・非日常の、大事・小事において、時々刻々に解決するならば、その解決してくれる人を覚者、仏といつてよいのではないか。もつとも、そのような人が現実に目の前にいたら、かえってわたしたちは、その人がいっこうに変わったことを言わず、あたりまえのことをあたりまえに言うだけだから、「仏」はもとより「覚者」とも、「導師」とも、「先生」とさえ思わず、呼ばぬかもしれぬ。「ありのまま」ということばを、あまり日常的な次元にまで引っぱって来て使っているので、われながらウサンくさいが、物事をありのままに見うる人は、おのれの姿かたちを飾りたてないだろうから、群衆の中で目だたぬかもしれぬ。あるいはあまり目だたぬさまが特異な相となつてきわだつたらうか。

先日、栴尾の高山寺へ行つた。明慧上人の廟所に「あるべきやうは」という上人のことばが石に刻んであり、上人の山中座禪の図の上の方に「楞伽山」の文字のあるのを見て、なんとなくなつとくした。(四月二十五日)